

## 留学によって切り開く私の人生



バトウルジー・ツェンドラオグ  
(信州大学留学生・モンゴル)

私はモンゴルの首都ウランバートル市から 430 キロメートル離れた地方の県出身であり、普通の公務員の両親に育てられた。両親は共働きで、幼稚園が休みの時、兄弟 3 人で家に閉じ込められて一日を過ごしたこともある。

獣医の父と、経済家の母は、二人とも遊牧民出身である。私は地方の都市で生まれ育ったが、おじいさんの跡継ぎである遊牧民の叔父の家で、毎年 6～8 月にある夏休みの期間を過ごしていた。お手伝い役で、広い草原の中に、羊・ヤギなどの面倒みたり、お母さん羊とヤギの乳を搾ったり、遊牧民の貴重な燃料源である家畜の糞を集めたり、乳を加工し乳製品を製造するプロセスに手伝ったりし、例年忙しい夏休みだった。

美しい自然の中で、ストレスもなく、美味しくヘルシーな食べ物いっぱい田舎はとても良い所だった。それでも、遊牧民という人生を選べなかった理由はいくつかある。その中で最大の理由は、父の影響である。モンゴルでは公務員は安定している職だが、給料が低い。現実では、毎月の給料で生きていくのは大変である。そのため、両

親は働いているにも関わらず、空いた時間を利用して、モンゴルで珍しくて人気の子供の革靴を作るなどして不足していた生活費を稼いでいた。仕事帰りの疲れた体で夜遅くまで針と糸で厚い皮をみるみるうちに小さくて可愛い靴にしていた両親の姿は今でも忘れられない。

その忙しい生活をおくっていた両親だが、毎晩本を読んであげたり、図書館へ連れて行ったりし、小さい時から本や教育の大切さを十分伝えてくれたとおもう。ダニエル・デフォー、アルクサンダル・デュマ、ジュール・ヴェルヌなど有名な作家の本を読み、母国だけではなく、世界についての視野や知識を得た私は、今まで父に一回だけ叱られたことがある。5 歳頃に、本の上に落書きし汚してしまったためだった。優しく、末っ子の私をいつも甘やかす父の怒っているのを初めてみた。

そんな家庭で育てられた私は、小学校 2 年の時から公立の日本式の小学校に通い、日本語を勉強し始めた。当初は、小学校の入試に受かっただけで、入学して何をするかについて何も知らないまま入学したが、日本語を勉強し、日本語を通して、日本国・日本人・日本文化にふれあい、人生に大きな変化が訪れた。モンゴルの学校は午前中だけであり、放課後の活動はない。日本が好きになり、中学校の頃から日本留学の夢を抱いた。しかし、そ

の時は、単なる日本に憧れた気持ちだけだったかもしれない。

中学校を卒業し、日本式の高校に入学した。この学校を優秀な成績で卒業し、日本留学試験に高い点数をとれば、高校から推薦され、日本の奨学財団から奨学金をいただきながら留学できるというチャンスもある名門校だ。

小学校から日本語を勉強してきた私は同級生に比べて留学する可能性が何倍も高かった。卒業後の試験で高い点数を獲得した私は、残念ながら高校から推薦されなかった。高点数に自信満々な私は、推薦されるのは当然のことだと考えていた。

当時、推薦されなかったことに何日間も信じられず、「結果発表がもう一回ある、もう一回ある」という妄想だけがあった。もちろん、結果発表は一回だけだ。推薦された同級生たちが日本留学の準備をどんどん進め、私は未だに信じられなく一ヶ月がさっさと経った。

その後、漸く実感し、食事ものどを通れない日々が続いた。「私は、今まで何をするために、何を信じてきたのだろう、私は何をできるのだろう、留学で何を得的のだろう」など自分に問い続けた浪人の一年だった。その一年は当時、長くて地獄のような苦しい一年だったが、思い返すと一番大事な、一番有意義な一年だった。自分は何が得意か、何が苦手か、

何をしたいかなど多くの質問・疑問の答えを見つけ出した一年だった。何も考えてないまま、ただ日本に憧れた気持ちで留学していたら、どうなっているのだろうか。今の自分がいるのだろうか。

一年浪人した私は、漸く夢の国日本にきた。憧れた気持ちではなく、学びたい気持ちいっぱいできた。自分に具体的な目標を掲げた。当初、スケッチにすぎなかったが、どんどん具体化し、今設計図になっているだろう。第一は、経営学の修士学位を取得することである。その後、帰国し、企業に就職し、経験をつむ。母国の企業の発展に貢献する経営コンサルタントになる夢がある。

人生に何があるか予測できない。私は夢を叶えられるかわからない。モンゴル語には、「考え続けていれば実現できる」という諺がある。この諺の通り、自分の夢のため一步一步頑張って踏んで行けば、自分の掲げたゴールにたどり着くだろう。

更に、甘えん坊な私は、家族や友達、親戚など私を囲んで愛情を注ぎ、私のことを大切にしてくれていた人々から離れ、気候も、環境も、食べ物など全部異なる日本にきて、もちろん大変なことが沢山あったが、それを自分一人で乗り越えられる力がしっかりと身についた。今まで、逃げ続けてきたことにも挑戦する勇気も湧いてきた。

その上、人間が助け合うことの価値を実感した。巣立った小鳥のように実生活に直面し、あらゆる問題や悩みに直面すると血のつながりもない他人が助けてくれることが沢山あった。これからも沢山あるに違いない。私は今まで助けられる側だが、いつか困っている人を助ける人になる。いつまでも感謝の気持ちを忘れないで過去の私のような人を助けるという目的を抱いたのも留学してからのことだ。

ゆとりのある遊牧民生活に引っ張られず、地方の学校を卒業し国内の大学に進学し、普通のO.Lになれずこの道を選んだことに一度も後悔してない。母国から出たことで違う観点からみるようになった。中にいてなかなかわからない、モンゴルの何が良いのか、何がいけないのかなど様々な質問の答をみつけた。母国を変えたい、発展させたいという意志も何倍も強くなった。

留学した私の外観にあまり変わりはないが、「なかみ」は生まれ変わったようになった。

(松本クラブ主催 第14回アジア賞作文コンテスト最優秀作品:2012年12月)